



綾部の地で70年。地域のみなさんのいのちを照らす。

生活に関われる医師になりたい

患者さんの課題や

リハビリテーション科・青柳医師のインタビュー

患者さんに寄り添い、支える医療がしたい

リハビリテーション科医を志したきっかけは、研修医時代にいろいろな診療科を経験したのですが、患者さんが急性期の治療を終えて回復していく過程に寄り添い、支える医療がしたいと思ったのが理由です。

リハビリテーション科医とは、「さまざまな疾患、障害、病態などにより低下した機能と能力を回復させ、残存した障害や不利益を克服する、『人々の活動を育む医学』を専門とする医師」とされています。私は患者さんを中心としたプロジェクト・マネージャーだと考えて

います。多くの職種が患者さんに関わっていますが、その知識を持ち寄って相応しい道筋を導き出すのがリハビリテーション科医の役割だと考えています。

患者さんと目標を共有。プロとして最善を尽くす

医師として大切にしていることが3つあります。①患者さんのモチベーション（意欲）を高めること、②スタッフでたくさんコミュニケーションをとること（私は「作戦会議」と呼んでいます）、③徹底的にリハビリテーションの目標設定にこだわることです。当然ながら患者さんは一律ではありません。病気や個性、生活されてきた背景も異なります。病気から回復する過程で「未来のありたい姿」をお聞きしながら、それぞれに応じた



AOYAGI JUN



リハビリテーション科 医師

青柳 潤

います。多くの職種が患者さんに関わっていますが、その知識を持ち寄って相応しい道筋を導き出すのがリハビリテーション科医の役割だと考えています。

だれもが安心してかかれる病院をめざして

外来のパンフレット、署名コーナーにLGBTQ関連の書物を設置しました。はじめての方にも分かりやすい内容で記載されたものを設置しています。ご来院の際はぜひ手に取っていただいて、当事者の悩みや私たちができることについて、気軽に触れていただきたいと思います。レインボーフラッグが目印です。



レインボーフラッグが目印です

院内にLGBTQの本などを置いていきます

訓練と「なぜそれをするのか」という理由を一緒に確認しながら目標を共有するようにしています。

また患者さんを支えるために、スタッフが相互に安心してコミュニケーションを取ることがとても重要です。

私は「話しやすさ」「助け合い」「挑戦」「新奇歓迎」がモットーです。この姿勢が良いアイデアを生み出す源泉になります。プロとして最善を尽くすために何でも気付いたことを言い合える関係が、さらに新たな気付きや創造を生み出します。私の言う「作戦会議」はそこを大きな目的にしています。

中面につづく

ご自由にお持ちください

174
2023.10

File

1

/新シリーズ/

今号より協立病院で働く職員をシリーズで紹介していきます。

このたびの

KYORITSUさん

食事で健康を届けたい!! 挑戦し続ける管理栄養士コンビ

Q マイブームは？

家庭菜園をやっているので、自分で育てた野菜を料理して食卓に並べることです。野菜作りも栄養と通じるところがあると感るので、日々勉強になります。

Q 大切にしているものは？

自分の気持ちに素直に生きることです。失敗すること多いのですが、思うことは言葉にして伝えたり、やってみたいことには挑戦していきたいと思っています。

Q なぜ、今の職場に？

家族が入院しお世話になった時、病棟で管理栄養士さんが働いている姿を見て、食べることで大切な人を守れるよう知識を身につけたい、と思えたきっかけの場所なので。

Q あなたからみた、協立病院は？

やさしい人が大勢働いている、親しみやすい病院だと思います。

Q マイブームは？

今これといった趣味やマイブームはないので、いろいろな事をやってみて見つけていきたいです。

Q 大切にしているものは？

大切にしていることは、まず相手の話を聴くこと。それから自分が話したいことを伝えるよう心がけています。早とちりしてしまう性格のため、これからも気を付けていきたいと思っています。

Q なぜ、今の職場に？

管理栄養士として働き始めてから病院で働きたいと思うようになりました。食事で健康になるお手伝いができれば嬉しく思います。

Q あなたからみた、協立病院は？

地域の方々に寄り添った医療を提供されていると感じます。やさしい方が多く私自身も見習いたいと思っています。



中島 仁美 さん
（公職3年目）

吉田 幸代 さん
（入職5年目）

病院理念

1. 安心安全の医療・福祉を推進します

私たちは、地域連携を大切にして、総合的に医療・福祉を提供し、地域の患者様の健康に責任を持ちます。私たちは、情報を公開・共有し、安心安全の医療・福祉を推進します。

2. 人権尊重・無差別平等の医療・福祉を提供します

私たちは、いつでも、だれもが安心して必要なサービスが受けられるよう、人権を尊重し、無差別平等の医療・福祉を提供します。

3. 平和を守り、社会保障を発展させます

私たちは、医療従事者の良心にかけて平和を守り、権利としての社会保障制度を発展させます。私たちは、患者様や地域の皆様、諸団体と共に、人間の尊厳が大切にされるまちづくり運動をすすめます。

公益社団法人 京都保健会 京都協立病院



〒623-0045
京都府綾部市高津町三反田 1 番地
TEL 0773-42-0440 (代表)
0773-42-0025 (小児科直通)
FAX 0773-42-9459 (代表)



発行：京都協立病院広報委員会

<https://www.kyoto-kyoritsu.org/>

日本HPHネットワーク
Japan Network of Health Promoting Hospitals & Health Services



ISO 9001 認証取得



協立病院 医師のある一日のスケジュール

リハ医
青柳医師が
行く!



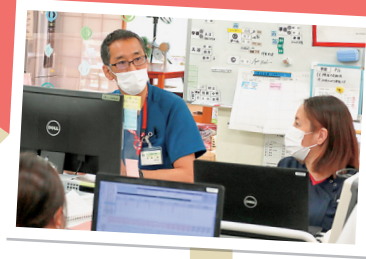
1日のスタート!

9:00
外来診察

疾患はもちろんですが人を診ることを意識しています。患者さんがどんなふうに暮らしておられるのか伺いながら、生活に合わせた治療法を考えます。

13:00
病棟リハビリ
カンファレンス

各専門職の目線から患者さんを捉えて、今の課題や、今後の目標を検討します。患者さんの思いを反映させたカンファレンスを心がけています。



11:00
訪問診療

病院と家では患者さんの表情が違います。患者さんにとって、病院は練習場、家が本番の舞台だと思っています。家族さんからお聞きすることが治療のヒントになることもあります。移動中の綾部の田園風景にも癒されています。



15:00
病棟診察

リハビリを処方したからには、ベッドで寝ている患者さんではなく、なるべくリハビリ中の患者さんの様子を見に行くようにしています。患者さんの動きをみながら、退院後の生活を想定した訓練を検討していきます。



14:00
嚥下造影、ボトックス

***嚥下造影**
安全に食べるために、どんな形態の食べ物がよいのか、姿勢はどうするかなどを実際に食べておられる様子を透視映像で見ながら検討しています。

***ボトックス療法**
脳梗塞などで、筋肉のこわばりがある患者さんに対して、筋肉に直接薬を注射することでこわばりを和らげる効果があります。



16:00
リハ回診

リハビリスタッフとディスカッションしながら、医師も一参加者として意見を伝えます。フラットなコミュニケーションの積み重ねがアイデアを生むことも多いのです。



17:00
学習会

定期的に医師だけでなく看護師、リハビリスタッフ、ソーシャルワーカーと合同で学習会を開催しています。上手くいったことだけでなく、困っていることや悩んでいることを持ち寄り、多職種で症例を振り返る良い機会であり、多くの気づきを得られる貴重な場となっています。



スタッフ合同で取り組んでいます

綾部市を中心に地域の医療を支える京都協立病院。今回はリハビリテーションに携わる医師にピントを合わせ、率直な思いを語ってもらいました。このコーナーでは医師の1日の動きを追いかけてながら、普段の診療内容をご紹介します。

入院中はトレーニング。
退院後は本番の試合

私はよく病棟をフラフラしながら患者さんになるべくお声掛けするようにしています。「頑張ってますね」「以前より出来ることが増えましたね」など、ちょっとした言葉が患者さんの意欲の源になるからです。謙虚に医師の責任や存在の大きさを自覚しながら、一方でリハビリテーションばかりでは息が詰まりますのでちょっとしたユーモアや世間話も交えながら(笑)、お話しさせてもらっています。

よく野球で例えるのですが、入院中はトレーニングや練習期間であり退院後は本番の試合です。試合が始まると予期せぬ事態もたくさん出てきて修正が必要になってきます。退院された後も患者さんの課題や生活に関わる医師になりたいというのが将来の抱負です。

綾部に着任して山々や田畑の緑の美しさを実感しています。それは今も昔もそこに住まわれている方々がこの土地や地域を守ってこられた証だと思っています。それが理由なのか綾部では高齢でも元気な方が多いですね。外来診療や往診にも出ていますので、今後ともよろしく願います。

手を入れてほっこり

「認知症マフ」

をご存知ですか?



マフとは、認知症ケアのひとつとして英国で広く使われている筒状に編まれたニット製品であり、リボンやボタンなどのアクセサリーが縫い付けられています。手を入れるとふわりあたたかく、マフの柔らかい手触りによって安心感が得られ、患者さんの精神的ストレスが軽減すると報告されています。当院でも、患者さんの背景や、好みに合わせ、スタッフが手作りのマフが活用されています。

参加者が初体験

8月23日(水)の午後



3種類のアロマをブレンドしてハンドクリームを作りました。雇用に関心をもち、夜は入眠・リラクゼーションを促すブレンドものと、参加者がそれぞれどう過ごしたいかを考えながらオリジナルハンドクリームが出来上がりました。和気あいあい、ほっこり笑顔がたくさん集まりました。看護師による手品に驚きと笑顔もあふれるひと時になりました。次回は11月に開店します。